教育機関としての大学を再考する

―手作りの「ゼミ」活動を中心とした「地球市民」育成の試み―

下羽　友衛
東京国際大学国際関係学部

An Attempt of Environmental Education for "Global Citizen " at T.I.U. and Reformation of University Education

Tomoe SHITABA
Department of International Relations, Tokyo International University
（受理日1997年９月８日）

１．はじめに

当ゼミでは、環境問題を切り口とした「地球市民」育成のための「ゼミ」活動が1992年度よりスタートした。ここでの「地球市民」とは「私たち生活者の利益を守るため、私たちの生活に関わるさまざまなレベルの問題を地球規模で考え、問題解決のために自発的・主体的に私たちを取り巻く社会に働きかけていく人々」を指す(図１)。私たちは「ゼミ」活動を通して、私たちの生活に関わるところの人類共通の課題である地球的諸問題、そしてそれらとつながる国際、国内、地域の問題の解決に対して、参加度が高く、高度な問題解決能力（問題解決に役立つ知識、態度・価値、技能）と高い持続性を有する「地球市民」（本稿では「パワフルな地球市民」と称する）の育成に取り組んできた。今大会のミニシンポジウムでの発表は、そこでの試行錯誤の成果をまとめた中間報告である。

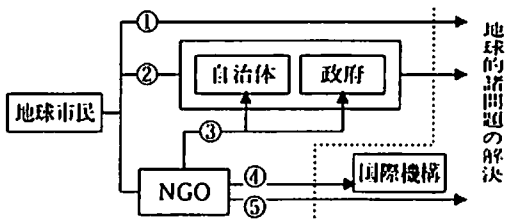

図１　地球市民の参加と地球的諸問題の解決

２．学習を促す条件

大学生の学習状況に関するアンケート結果を基に、学生に「なぜ日本の学生の多くは勉強しないのか」を尋ねてみたところ、彼らの答えの中で最も多かったのが「大学での勉強は社会に出てから役立たないから」という理由であった。そして「なぜ日本の多くの国民は自分たちの生活をよりよくしていくために社会に積極的に働きかけようとしないのか」という問いに対して、「自分一人が行動しても世の中（社会）は変わらないから」との理由が大多数を占めたのである。

そこで、以下の２点が充足されるならば学生の学習意欲を促すことができるのではないかというヒントを得た。①学習者の利益、すなわち生活者としての利益と社会で要求される能力を身につけるという意味での社会人としての利益、の点から「ゼミ」活動で得られる学習者の利益を論理的かつ実証的に説明すること。ちなみに社会で要求される「能力」とは、例えば課題を発見する力、解決案を策定する力、関係者にそれを提示する力、協力を得てそれを実施していく力、である。②行動へのエネルギーを生む循環プロセス、すなわち「行動→社会への影響・社会の変化→感動・自信→行動」を体験学習させることによって、学習者に「私たち市民は決して無力な存在ではなく、社

（問い合わせ先）〒350-11　埼玉県川越市的場 2509　東京国際大学　国際関係学部

会変革の可能性を持った主体である」という意識を持たせること。

3．教育（学習）方法

1)特色：
①理論とケーススタディを両軸にした参加体験型、問題解決型、行動型であること。つまり、私たちの生活に関わる地球的諸問題に対して諸々の理論を用い、かつ現場体験学習を加えて具体的解決策を提示し、それを足元から実践するという作業に重点をおいていること。②ここでの実践は「日常生活－大学－川越－埼玉－日本－アジア－世界」というつながりの中でなされていること。③「パワフルな地球市民」育成のあり方を教師と学生、そして学生間の共同で研究しながら学習していくという共同研究・学習の形態を取り入れていること。④教育（学習）プロセスを卒業後も含めた生涯教育（学習）という長期的観点から捉えていること。⑤「ゼミ」活動は日本人学生だけを対象としたものではなく、外国人留学生、「ゼミ」活動に関係する国内外の人たちをも含むという意味で地球的視野に立っており、彼らとの交流を重視していること。⑥学生の自主的参加を促す形態を取っていること。[　a)ディスカッション形式　b)民主的な教育環境（学年間、教師と学生間の民主的意思決定方式）　c)教師が一方的に教え込んだり考え方・生き方を強要しないこと　d)教師が上から監督・指導するというよりも必要に応じてヒントを与えるという問いかけ型であること]
2)共通の「問いかけ」：
「ゼミ」活動は多岐にわたっているが、それらは相関連して機能しており、そこには「パワフルな地球市民」へ導くためのいくつかの共通の「問いかけ」が根底におかれている。①私たちの生活は生活者の視点からすると本当に「豊か」なのか。②私たちの生活に関わる問題とは何か。それらの問題を国際社会の問題、国家の問題、市民の問題、そして自分自身の問題として考え、私たちがどう生きていったらよいのか。つまり、地球社会における相関連する部分としての私たちの生き方を縦軸（時間）と横軸（場の広がり）の中で考えるということである。③課題への解決策の提示という視点からそれらの問題とそれらを生みだす構造を「同根異色の花」として捉え、それをどのような関係性の中で体系的に理解したらよいのか。④問題解決への政策決定過程はどうなっているのか。その政治過程で私たちは、市民（地球市民）として何ができるのか。何をどうすれば何が変わり得るのか。⑤その際どのような資質が必要とされるのか。それらの資質はいかなる方法といかなる内容の活動によって効率よく培えるのか。私たち教師と学生はこのような「問いかけ」のもとで「ゼミ」活動（図２）を行ってきた。

4．「ゼミ」活動の具体的内容

（１）本ゼミ：本ゼミでは国際社会における「応用問題（諸事象）」（それに関連する国内、地域の「応用問題」をも含む）を解くための「方程式」として主要な国際理論を学ぶ。学生は本ゼミでの学習効果を高めるため、事前にレポートの作成と自主的にサブゼミを行う。それらを通して議論のポイントをテキストに沿って整理する。司会はすべて学生が担当し、教師は必要に応じて途中で助言することもあるが、通常最後の10分間にコメントを加えるだけである。

（２）秋霞祭（準備から報告書作成まで）：①秋霞祭での共同研究は１年から４年までの学生が、自主的に３月より１年間かけて共同作業として次の循環プロセスで行う。［計画→実行（資料集作成・展示・研究発表・パネルディスカッション）→『回帰線』（参加者の自己点検・評価集）、『報告書』（研究発表とパネルディスカッションの総括・抄録）の作成→次年度の計画]②秋霞祭活動は原則として自由参加である。この活動の意義については参加者が『回帰線』の中で記載しているので、参加は決して強制しない。③パネルディスカッションの特徴は３つある。1)市民団体関係者、専門家・研究者、地域住民、学内外の学生などが自由に参加し交流できること、2)ゲストパネリストとともに学生がパネリストとして、またフロアーから討議に参加できること、3)ゲストパネリスト

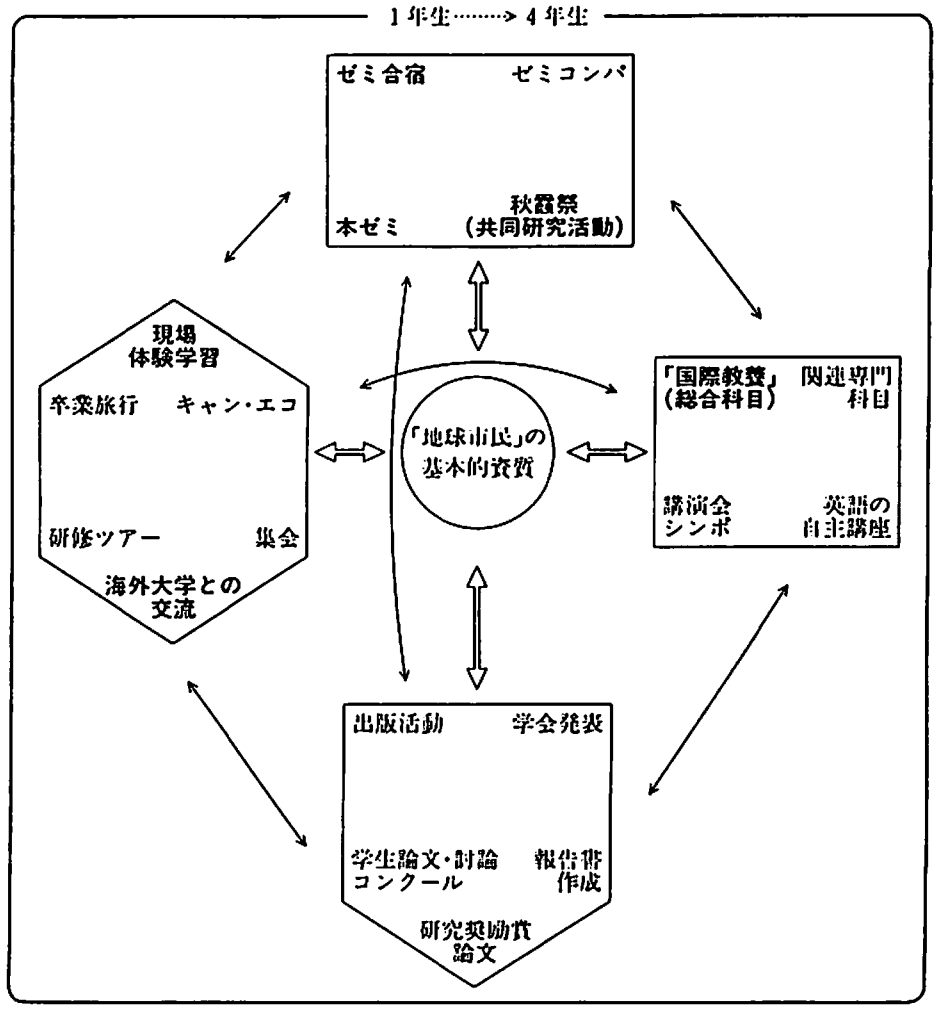

図2 「ゼミ」活動間の相互作用

の選考から司会・進行まで、すべて学生主体で行うこと。ちなみにゲストパネリストへの謝礼は交通費のみである。したがって彼らに参加していただけるかどうかは、学生の情熱と企画の意義を彼らにどう伝えていくかにすべてがかかっている。ここでの交渉過程は学生にとって実に学びの場となっている。

《秋霞祭活動の共同研究・学習のテーマ》

【1992年度】ゴミから森林破壊までグローカルに環境問題を考える 1「環境問題と私たちの意識改革」、2「地域が環境問題にどう取り組んでいくべきか」、3「モデル国際環境会議」

ゲストパネリスト:高杉晋吾(社会評論家)重森善夫(桶川市清掃センター所長)依田郁夫(リサイクル文化社)下羽初枝(川越市社会教育委員)クリスチャン・ウール(オッフェンバッハ市民)伊藤安男(埼玉県西部環境管理事務所所長)小島美里(新座市議会議員)原田守雄(川越市環境部長)

【1993年度】1「環境保護のためなら高い商品でも買いますか?」～消費者意識アンケート調査結果／日米独・学生国際比較～、2「南北格差と環境問題」 ～日本とアジアー国際協力のあり方を考える～、3「環境NGOの現状と展望」 ～地球環境を考える市民運動のこれから～

ゲストパネリスト:塚田幸三(ＪＩＣＡ環境・女性課長代理)小島延夫(弁護士・日弁連環境委員)信夫隆司(武蔵野短期大学助教授)黒坂三和子(世界資源研究所上席研究員)岩崎駿介(ＪＶＣ特別顧問)須田春海(市民運動全国センター代表世話人)

【1994年度】「地球的諸問題から私たちのライフスタイルを考える」 ～環境・食糧・軍備・人権の視点から～

【1995年度】「地球的諸問題から私たちのライフスタイルを考える」～なぜ私たちのライフスタイルは変わらないのか～、～どうしたら私たちのライフスタイルは変わるのか～

ゲストパネリスト:申東柱(在日韓国大使館:埼玉韓国教育院長)ヴィルフリート・シュルテ(在日ドイツ大使館:参事官)野村かつ子(海外市民活動情報センター代表)須田春海(市民運動全国センター代表世話人)

【1996年度】「原発問題から私たちの生き方を考える」

【1997年度】「廃棄物問題と市民」～私たちは社会変革の主体として何ができるか～（予定）

（３）ゼミ合宿（ゼミ以外の人々との交流、ディスカッションを含む）：合宿は次の目的で春季（２泊３日)、夏季（３泊４日）に実施される。①春季は前年度秋霞祭活動の総括と新年度秋霞祭活動の企画、夏季は主に秋霞祭活動の中間発表②理論学習面での不足部分の補習③前期、後期のゼミ活動の内容と方針についてのオリエンテーション④ゼミ以外の人々との交流（市民団体関係者、企業人、高校教師、外国人留学生、ゼミ卒業生、学生など）⑤現場体験学習の報告

（４）ゼミコンパ：教師抜きの学生主体のコンパで学年の枠を超えて行われる場合が多い。そこでは普段疑問に思っていることを民主的環境の中で議論し、相互に学び合う。

（５）卒業旅行：旅行先と内容は学生が企画する。1994年度は世界遺産として登録された屋久島を、1995年度には基地返還問題を抱える沖縄を訪れた。屋久島では縄文杉や屋久杉自然館を訪れたばかりでなく、当地の町議会議員から屋久島における環境保全運動についての講義を受け、同行した専門家を含めて議論した。沖縄では沖縄基地返還運動に関わる市民団体のツアーに便乗してピースガイドのもとで基地と戦跡（ガマ）巡りを行い、また集会にも参加した。

（６）キャンパスエコロジー活動（要望書の提出、学生団体、大学側との交渉など）:学生が彼らの利害に関わる学内の問題を発見し、その問題を解決するための行動を循環プロセスを通して起こす。彼らはとりわけ、学内における環境問題に関する課題に対して主としてゼミ組織をもとに自らのイニシアティブで行動計画を立て、実践し、活動の自己点検・評価を行い、そして再び新たな計画を立て行動する。

（７）海外大学との交流プログラム(ゼミ主催)：以下のプログラムはひとつの問いかけ、すなわち韓国、ドイツ、フィリピンでの交流・体験学習と国内での留学生との交流がそれぞれ「パワフルな地球市民」育成にどのような役割を果たしうるのか、という問いかけのもとで学生のイニシアティブによって、あるいは学生と教師の共同作業で企画された。①韓国・キョンヒ大学での交流(1995.8)②ドイツ・ハイデルベルク大学での交流(1995.12)③フィリピン・フィリピン国立大学での交流(1996.3)(1997.3)④留学生が継続的にゼミに参加して行われる交流⑤ハイデルベルク大学の学生との一日交流(1995.3)⑥ハイデルベルク大学の学生との合宿での交流(1995.3と1995.9)

（８）出版活動：学生主体のイニシアティブの下で編集委員会が構成され、出版活動を通して「地球市民」としての働きかけを地域、国内、国際社会へ行う。①『未来への発信／学生の環境問題報告－国際協力のあり方とＮＧＯの役割』（くろうじん出版事務所）の刊行(1994.4)②同書中国語版（人民出版社）の刊行(1996.11)③『環境・地球的諸問題・市民－地球市民育成のための参加型環

境「共育」の実践』(国際書院)の刊行作業(未刊)

(9)報告書の作成(秋霞祭、韓国、ドイツ、フィリピン訪問など):報告書の作成には4つの狙いがある。第一はそれぞれの活動の総括、第二はその活動から得られた「パワフルな地球市民」としての育成度に関する自己点検・評価にある。また参加しなかった学生に間接体験をさせる狙いもあり、さらに内外の関係者、関係機関への配布による社会への発信も同様に意図されている。

(10)研究奨励賞論文への応募:この応募は学生が自ら実践してきた「パワフルな地球市民」育成の共同研究・学習の成果をまとめ、社会へ発信することと、その執筆過程で「地球市民」としての基本的資質を培うことを狙いとしている。執筆者は少数であるが、完成までの過程で多くのゼミ生がコメントをしたり、アンケート調査・集計作業を協力して行う。

(11)現場での体験学習(1996.3 原発・産業廃棄物の現場):《原発:①巻町(新潟県)②敦賀市(福井県)③双葉郡(福島県)》《産業廃棄物:①豊島(香川県)》彼ら(3年)は1996年3月の春休みと8月の夏休みを利用して現地を訪れた。私たちの生活に密接に関わるこれらの社会問題が、どのような構造のもとで起こっているのか、問題解決の政治過程で市民はどのような役割を果たしているのか、について地元関係者へのインタビューを中心に調査することがその目的であった。それらの体験学習を通して、学生は自分たちの生活する社会の問題に気づき、そこで「何ができるのか」「何をすべきなのか」について考えるきっかけとなっている。また、8月と翌年1月には4年生数名が一般廃棄物と産業廃棄物の現場である小野町(福島県)を、そして他のグループは御嵩町(岐阜県)を1997年3月、6月21~22日、8月に同様に訪れている。

(12)「国際教養」(総合科目):この総合科目は各界の指導者、専門家を招いてさまざまな角度から"日本と世界の関係"について考察する授業で、3年次生の必修科目として位置づけられている。一方、「国際教養」はオープン・キャンパスとして一般の人々にも開放され、多様な地域住民との交流の場ともなっている。1994、95年度は筆者が担当し、①「地球社会を考えるⅠ」(1994年度)②「地球社会を考えるⅡ」(1995年度)というテーマのもとで私たちの生活と不可分の関係にある地球社会の諸問題を地域・国内・国際社会のレベルから扱い、その「解答」を模索した。地球社会の問題とは何か、それらの問題を生み出す構造・問題群の関係性はどうなのか、問題解決への具体策はあるのか、そして問題解決の担い手はどう育成していくことができるのか、以上である。

(13)関連専門科目:「地球市民」としての基本的資質を培ううえでとくに、役に立ったと思われる科目として国際政治学、国際政治史、国際関係論、国際協力論、国際経済学、比較経済体制論、日本経済論、世界環境論がアンケートの回答に挙げられた。

(14)本学教授による英語の自主講座(1996.2.17~):「地球市民」の育成に賛同された英語担当教授がコミュニケーション能力を高められるようボランティアで指導を行っている。

(15)講演会、シンポジウム(16)集会:当ゼミでは「ごみ問題さいたまの会」「市民フォーラム2001」「バルディーズ研究会」「国際理解教育センター」「アジア女性資料センター」「アジア太平洋資料センター」などからの催しに関する情報を学生に提供している。それ以外に学生が自らちらしを持参し配布する場合もある。

(17)学生論文・討論コンクールへの応募:希望者が「社会変革へのラブレター」としてコンクールへ応募している。そこで彼らは「ゼミ」活動で培った「共感を持った知的分析」能力に基づいて論理性と実証性を持った自己主張を展開している。

(18) 現場での体験学習(個人)：幼稚園での現場体験学習（「教育実習」とボランティア活動)、教育実習、入間川での魚の大量死の現場、東京ごみ埋め立て処分場見学（市民リサイクルの会主催)、阪神大震災後の神戸でのボランティア活動、米国・オレゴン州政府でのインターンシップ、国連本部でのインターンシップ、国連難民高等弁務官東京事務所でのボランティア活動、ドイツ・ポーランドの環境問題への取り組み調査、信州国際セミナー、海外ゼミナール、米国訪問、タイ・マレーシア海外旅行、バングラデシュ・ベトナム・韓国訪問、マレーシア海外旅行、海外旅行

(19) 研修ツアー：ピースツアー、ＮＧＯを通じてのスタディツアー（タイ：10日間)

(20) 学会発表：学生（４年）２人が1995年５月、日本環境教育学会第６回大会（報告テーマ：「地球市民育成のための参加型教育－学生による手作り学習の実践－」）と同年11月、日本国際理解教育学会1995年度研修会で報告（テーマ：「地球市民育成の条件とは何か－下羽ゼミの諸活動を通じて－」）また1997年５月、日本環境教育学会第８回大会　大学環境教育研究会ミニシンポジウム（テーマ：地球温暖化問題と大学環境教育－ＣＯＰ３京都会議に向けて－）で学生（４年）４人が報告（テーマ：「地球市民のための環境学習のあり方－学生の立場からの報告－」)

(21) その他：高校時代の留学、ＴＩＵＡ（東京国際大学アメリカ校）留学、オーストラリア短期留学、ＮＧＯ・ＮＰＯへの参加、地域・海外でのボランティア活動、大学での課外活動、ゼミ生との個人的付き合い

（１）～（21）以外の「ゼミ」活動として次の活動が付け加えられる。《「環境ネットワーク（三重大学)」との交流（1994年11月）／エコリーグ東日本主催「ユース・エコロジー・ギャザリング」分科会担当、テーマ：「ＮＧＯとＯＤＡ：環境・開発・人類益・国益」（1994年12月）／ＮＨＫ第１放送「ラジオ公園通り」（テーマ：「がんばれ若者ネットワーク」）にゼミ代表（４年）が出演（1995年２月）／「埼玉県立川越南高校　自主講座」で下羽ゼミの活動を報告、テーマ：「『未来への発信』から見えてきたもの」（1995年３月)》

５.「地球市民」としての育成度

アンケート調査（２、３、４年生、前年度卒業生を対象に1996年３月実施）結果から、「ゼミ」活動は参加者各自の生き方そのものを問うものまでに至っており、それがかなりの程度行動として表れていることが分かった。「ゼミ」活動を始める以前には「私たち市民（地球市民）は決して無力な存在ではなく、社会変革の可能性を持った主体である」ことを実感できていなかった回答者が67.8％であったのに対して、「ゼミ」活動を通じて91.1％の回答者が実感したとしている。そして35.7％の回答者が既に自分のできる範囲内で市民（地球市民）として実践している。こうした社会変革の可能性を持った主体としての強い実感と行動は、私たちが「ゼミ」活動を通じて実際に社会（大学、地域、国内、国際社会）へ働きかけ、目に見える形で影響を少なからずもたらしている成果によるところが大きい。

ちなみに市民運動への参加経験を問う調査（３、４年のゼミ生を対象に1997年３月実施）では、神戸大学大学院の院生が行った調査（全国17大学の学生を対象に1996年６月実施）結果と比較してみると運動参加経験者の比率が約4倍と高かった（表１)。

同様にその傾向は、個々のケースでの具体的行動にも顕著に示されている。例えば「環境保護を考慮した商品購入と価格の関係」についての日米独・現代学生比較調査（1992年６月の地球サミットの翌年にゼミ生が実施：前掲書『未来への発信／学生の環境問題報告』）の結果と今回の調査を比べてみると分かりやすい。それによると、同価格でなければ買わない、と回答した者は1993年の調査ではドイツ7.8％、アメリカ11.4％、日本34.7％であったのに対して、ゼミ生を対象とした今

表1 運動参加経験の比率

	当ゼミ 3・4年生(27)	大学生の意識調査(492)
①反戦・平和運動	5(20.8%)	19(3.9%)
②反核運動	3(12.5%)	11(2.2%)
③反原発運動	9(37.5%)	7(1.4%)
④反公害運動	2(8.3%)	2(0.4%)
⑤環境保護運動	9(37.5%)	24(4.9%)
⑥消費者運動	2(8.3%)	5(1.0%)
⑦反差別運動	1(4.2%)	5(1.0%)
⑧人権擁護運動	3(12.5%)	12(2.4%)
⑨労働運動	0(0.0%)	4(0.8%)
⑩学生運動	3(12.5%)	14(2.9%)
⑪参加経験なし	10(41.7%)	422(85.9%)
⑫その他	1(4.2%)	9(1.8%)
無回答・不明	3(12.5%) 無回答	1(0.2%) 不明
運動経験者	14(58.3%)	70(14.2%)

集計結果 運動経験者14(58.3%)
[男9(100%)：女5(33.3%)]

回のアンケートでは1.9%であった。 同じく、フランス核実験（1995年）に対してのゼミ生の行動にもその傾向が表れている。当時、仏ブランド商品の不買運動が低調であった日本の状況下でフランス製品の不買運動を行っているとした回答者が64.3%にも上った。

さらに「ゼミ」活動から現在の生き方・ライフスタイルに影響を受けていると回答した者が92.8%、職業（進路）の選択において受けているとした回答者が78.5%であった。

6.「地球市民」としての基本的資質の育成度 ―「知識」、「態度」・「価値」、「技能」

「地球市民」としての基本的資質の育成度は程度の差はあるにせよ一部を除いて全体的には高かった（表2）。なおそれぞれの基本的資質は、例えば環境という「知識」と環境を大切にする心という「態度」・「価値」との関係に、また人権と環境という「知識」間にみられるように相互に影響を受けており、他の資質と切り離して捉えることはできない（図3）。

7.「地球市民」としての基本的資質の育成度と「ゼミ」活動の相関関係

「ゼミ」活動の中で「地球市民」としての基本的資質を育成するうえで最も役立ったと思われた活動は、本ゼミでの理論学習と秋霞祭という場での環境問題をテーマとした共同研究であった。それに続く活動がゼミ合宿、海外大学との交流、現場での体験学習、「国際教養」（総合科目：「地球社会を考える」）、卒業旅行である。

卒業旅行は4年生全員の現場体験学習ともいえるので、また現地を訪れる海外大学との交流もそこでさまざまな現場体験学習が含まれていることから、双方とも広い意味での現場体験学習ともいえる。同様に「国際教養」も実際に現場で活躍されている人たちとの直接の出会いの場であり、彼らの話が聞けるという点で間接的に現場体験学習をしていることになろう。その意味において、現場での体験学習に関連する活動は「地球市民」的資質の育成に効果的であるといえよう。

8. むすび

私たちは学習者の利益と、行動へのエネルギーを生む循環プロセスを想定して、多岐にわたる特色をもった教育（学習）方法と多種多様の諸活動を織り成す広い意味での「ゼミ」活動を行ってきた。それによって「分からないから変わらない」「分かっちゃいるけどやめられない」という体質から「パワフルな地球市民」へと体質改善が徐々になされた。この「体質改善」の教育（学習）方法をここでは「漢方薬療法」と称する。「漢方薬療法」とは、つまり多種多様の質・量を備えた素材（「ゼミ」活動の構成部分）を多岐にわたる手法で長期間煎じ（相乗効果を図り）、「パワフルな地球市民」へと体質改善を図る一つの教育（学習）方法である。

「漢方薬療法」では、とりわけ教師の役割が重要である。その役割は、一つには学生に対して「問診」を十分に行うこと、すなわち「問診」によって、なぜ「地球市民」への体質改善がなされないのか、そこにおける因果関係は何であるのか

表2　「地球市民」としての基本的資質の育成度

回答者（留学生）%：回答者総数56（留学生7）

「地球市民」の基本的資質＼育成度		①できた	%	②まあまあできた	%	③どちらともいえない	%	④あまりできなかった	%	⑤できなかった	%	無回答	%
問1知識	A)平和の維持	8(5)	14.3	35(2)	62.5	10	17.9	3	5.4	0	0	0	0
	B)人権	22(6)	39.3	24	42.9	8(1)	14.3	2	3.6	0	0	0	0
	C)開発	21(6)	36.5	27(1)	48.2	6	10.7	2	3.6	0	0	0	0
	D)環境	30(7)	53.6	22	39.3	3	5.4	1	1.8	0	0	0	0
問2態度・価値	A)自尊心	19(4)	33.9	22(1)	39.3	11(2)	19.6	2	3.6	2	3.6	0	0
	B)他者を大切にする心	31(6)	55.4	17	30.4	4	7.1	4(1)	7.1	0	0	0	0
	C)環境を大切にする心	23(5)	41.1	29(2)	51.8	4	7.1	0	0	0	0	0	0
	D)平和と正義を大切にする心	19(4)	33.9	24(3)	42.9	10	17.9	2	3.6	0	0	1	1.8
	E)心が開かれていること	22(5)	39.3	26(2)	46.4	7	12.5	1	1.8	0	0	0	0
	F)共感できること	16(4)	28.6	23(2)	41.4	14	25	3(1)	5.4	0	0	0	0
	G)連帯意識	16(4)	28.6	23(2)	41.1	14	25	2	3.6	1	1.8	0	0
問3技能	A)批判的な思考	10(5)	17.9	26(2)	46.4	17	30.4	3	5.4	0	0	0	0
	B)協力	15(5)	26.8	30(2)	53.6	8	14.3	2	3.6	1	1.8	0	0
	C)想像力	13(3)	23.2	26(2)	46.4	12(2)	21.4	5	8.9	0	0	0	0
	D)主張能力	6(3)	10.7	25(4)	44.6	14	25	11	19.6	0	0	0	0
	E)問題解決能力	3(3)	5.4	19(3)	33.9	20(1)	35.7	13	23.2	1	1.8	0	0
	F)参加	3(3)	5.4	18(3)	32.1	19	33.9	13(2)	23.2	3	5.4	0	0
	G)忍耐力	15(4)	26.8	25(3)	44.6	15	26.8	1	1.8	0	0	0	0
	H)コミュニケーション能力	6(4)	10.7	10(3)	26.8	12	21.4	13	23.2	10	17.9	0	0

を知ることである。次に、「問診」の結果を基に「調合師」として、個々の学生の「症状」に合わせて「漢方薬」の素材（「ゼミ」活動の構成部分）を適切に調合することである。そして最後に、調合した「漢方薬」の効用を彼らに説き、それを自発的に飲ませることである。このように教師は、「漢方薬療法」による「パワフルな地球市民」育成において「問診者」「調合師」「助言者」としての役割が期待されている。

この「漢方薬療法」は、広い意味での「ゼミ」活動を大学改革とのつながりの中で捉え、実践してきたものである。当然のことではあるが、「漢方薬療法」の効き目を促していくには教授会メンバーがそれぞれの立場で「パワフルな地球市民」育成のための大学改革を体系的にかつ持続性を持って推進していくことが不可欠である。大学改革のあり方によって「問診」の方法や「漢方薬」の素材の質・量が変わり、同時にその素材の煎じ方と時間も改められることになるからである。

ここでの大学改革とは、カリキュラムの検討（ゼミ制度、総合科目、語学科目など）、海外交流制度の充実、学習奨励の制度づくり、大学祭のあり方の見直し、学生による授業評価制度の導入、学生のための図書館づくり、大学の自己点検・評価制度の見直し、大学と地域社会との関わり方の検討、などのいわゆる「雑務」を指す。

また、大学改革には同様に「パワフルな地球市民」としての学生の役割も大きい。彼らと「パワフルな地球市民」としての教師との連携のもとで大学改革へのエネルギーは相乗して大きくなることは私たちの学内での体験学習からしても疑いの余地がない。その意味で、「漢方薬療法」には「パワフルな地球市民」育成のための教師と学生の相互教育（「共育」）が欠かせないのではないか。

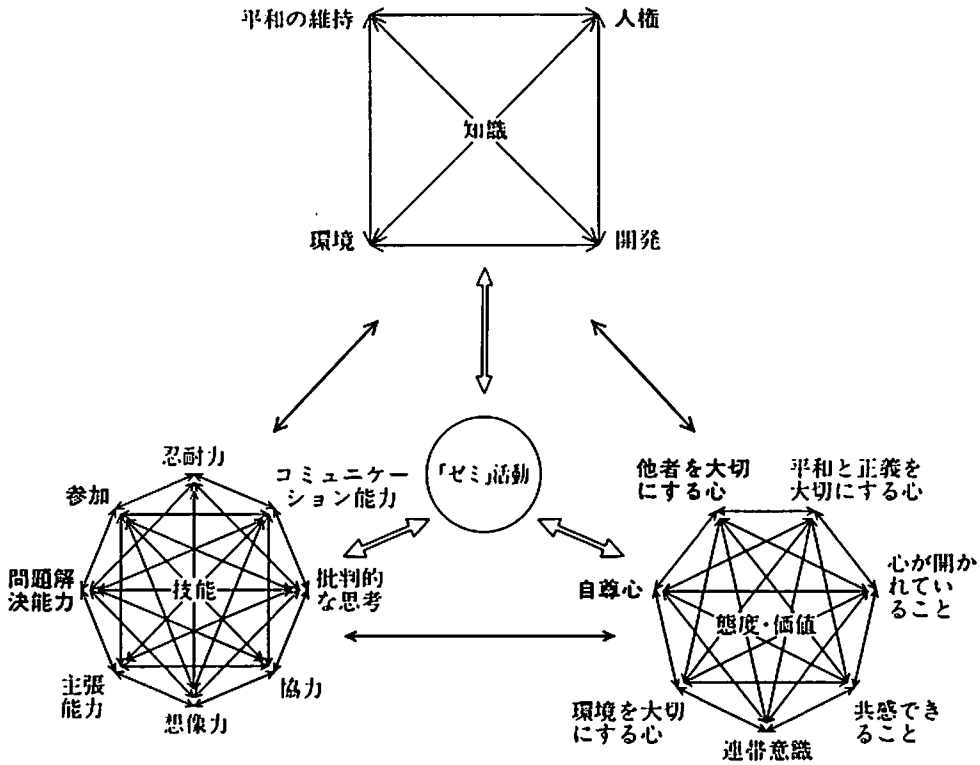

図3 基本的資質間の相互作用
[ブリスベン報告の国際教育に関するカリキュラム構造の図を若干修正]

（注） 図1は、高瀬幹雄「17幕 国境を越える外交」『国際政治の21世紀像』有信堂、1995年の図の中の名称を2点書き換えたものである。1点は「市民」を地球市民に、もう1点は「国際的な問題の解決」を地球的諸問題の解決に換えた。なお、元の図の説明については前掲書200−202ページで具体的事例を用いてなされている。図1の地球的諸問題には、それらに関連する国際、国内、地域の問題も当然含まれる。図2、3、表1、2は拙稿「大学環境教育における『地球市民』育成の試み－手作りの『ゼミ』活動を中心とした実践と成果－」東京国際大学論叢 国際関係学部編 第3号（通巻第54号）1997年9月、より引用した。「地球市民」としての基本的資質の育成度と「ゼミ」活動の相関関係の図は割愛した。内容の詳細については前掲拙稿を参照。